

表1 調査の設問特性とその要因

	特性	要因
促進特性・要因	意志力	要求・欲求、意欲・やる気
	耐久性	ふとう不屈、持続力・根気
	自己統制力	自律心、抑止力
	洞察力	計画・企画力、目的志向性
	感情・情緒	適応力、寛容・寛大
阻害特性・要因	衝動性	軽卒、注意散漫
	自己防衛	逃避、自己主張
	目標・価値観の喪失	目標不明確、興味・関心の欠如

(3) 調査対象及び研究協力校  
調査対象の選定に当たっては、先ず調査対象地域が特定の地域に偏ることのないよう配慮し、しかも都市部、町

の家庭生活及び学校生活の二場面としてそれぞれの場面に對し、耐性の促進特性・要因と阻害特性・要因の、それぞれの要因から設問構成を図った。  
更に、家庭生活の場面・学校生活の場面に對し、児童生徒の自己評価を行うとともに、保護者は子供の家庭生活の場面、一方教師は学校生活におけるさまざまな様態を評価することにし、三者の相互関係が容易に把握できるように設問の構成を図った。  
なお、保護者と教師に對しては、育てたい子供の性格調査、教師には、耐性を支える要因、阻害する要因について設問した。また、保護者には「しつけ」に對する養育態度の設問を併せて行った。

表2 予備調査にみる「耐性」の概要 (調査校4校、対象学年・小学校6年)

設問要因	保護者 (97人)	児童 (97人)	教師 (59人)
育てたい子供の性格	健康な子63%、思いやり51%、責任感のある子35%、根気強い子20%の上位順である。(複数選択)		根気強い子73%、勤動性45%、たくましい子38%の上位順である。(複数選択)
耐性の傾向(がまん)	がまん強さを希求する親が93%となっている。		意志薄弱88%、目標喪失60%、衝動性50%の上位順である。(複数選択)
根気強さ	ねばり強さは普通であると答えた親59%に対し、児童の答えた「どちらともいえない」58%と一致する。	どちらともいえない58%、あきやすい25%ということは、場面、事象によっては、あきやすいということである。	7割の子供が根気強い 30% 3割 " " 37% 5割 " " 33%
意欲・やる気	困難に對する意志力(意欲)は73%の親が望ましい傾向にあるととらえていく。子供の自己評価よりきびしくみている。	困難に對して、くじけないで取り組もうとする意欲は88%で、当初の予想を大きく上まわった。本調査で再吟味の必要がある。	勉強など困難になると、ほとんどあきらめてしまう21% 半数があきらめてしまう33% わずかの子供があきらめる46%
要求・欲求	物的な要求・欲求に對し83%の親が、子供は無理はいわないとみている。	要求・欲求に對する自制心は77%と最も多く、望ましい傾向を示しているが、このことは子供の真の姿とは思われない。	
耐久性・持続力	親としては、後までやらせたいが思うようにいかないと答えているのが97%である。ねばり強さの関連でみると疑問である。	児童は、困難なことがあると、たまに親がかわってしてくれるが55%であり、最後までやらされるが45%である。このことは、親の代行行為がやや強いといえる。	
教養態度	わがママを一応は諭すが、きいてしまうが72%であり、一般的な養育態度とみられる。	わがママを親はゆるしてくれるが80%で、親とほぼ一致する。	
指導方法			最後までやらせる66%、承認・賞賛58%、目標設定55%の上位順である。(複数選択)
予備調査からみた課題	1. 「耐性」を醸成しなければならぬという意識はかなり高いが、具体的な養育態度・しつけのあり方となる弱みではないだろうか。 2. 学校生活に比較して家庭生活の方が耐性についての子供一人一人の真実の姿があらわれるので、親としてどのように対処するかが望まれるのではないか。	1. 「どちらともいえない」が多いことは真に根気強さ、意志の強さがはたらくというのではなく、単なる興味・関心がそうさせているのではないだろうか。 2. 子供自らが耐性の諸要因を自覚してたくましく健康的な行動・態度をとることができるようにするには、耐性が培われる事象・場面を多くし、経験させることが大切なことではないか。	1. 学級の児童に欠けている性格として耐性にかかわることが断然多いということは、これが、学年・学級目標ひいては学校の教育目標にどのように関連づけられているのかを吟味していかなければならないのではないか。 2. 学校という集団生活のワクの中では、同じような行為であっても、内にははたらく耐性の諸要因は子供一人一人によって異なる。これを指導の実際に当たってのがきかないことが耐性醸成につながるのではないだろうか。
まとめ	家庭生活における耐性醸成の場面・事象の把握と積極的な指場。	より多くの生活経験に根ざした自覚。	学校の教育活動全てを通した意図的・計画的かつ発展的指導

村部、山村部等を考慮して、県内から小学校十四校、中学校十四校の計二十八校を選定し、その調査対象校を研究協力校に依頼した。(研究協力校名については、当教育センター発行の「所報ふくしま第六号」を参照願いたい) また、調査対象者は、研究協力校の

児童生徒約二千名(小学校四年生、中学校二年生各一千名)とその保護者二千名及び教師約六百七十名とした。これらに、この研究の概要を述べ、業の一つである生徒指導に関する研究の「児童生徒の耐性に関する研究」に

ついて、その取り組みの概要を述べてきたが、この研究がいくらかでも教育現場の指導の一助として役立つものになるよう努力しているとこである。なお、研究の成果については、本年度末に紀要として刊行し、各校に配布する予定である。